

幼児の人格の発達と保育上の問題点 (二)

帆 足 喜 与 子

今回から、人格形成を理論的に記述してゆこうとおもうのだが、理論篇においても、心理学書などのふつうのゆき方と逆コースをとる方が実際のにわかりやすいと考える。つまり、人格形成における人間の側の条件、それに対する環境の条件などを要素的に分析して説明するよりも、人間形成過程の全体的なすがたをききにとりあつかおうということである。

二 人格形成の二大側面

人がどんな人間であるかということを、大きく二つに分けてみることができるとおもう。つまりその一つは、おのおのの人間の性能がどんなであるか、いいかえれば環境に対していかによくはたらきかけるかという効果性に関する問題であり、もう一つはおのおのの人間がどんなことを好み、何を学習し、どんなものを具体的に生産しているかの問題である。

あとの例からさきにいうと、たとえば、人が一生の間に、日本舞踊を習ったか、バレエを習ったか、抽象画を好きになったか、具象画を好きになったか、あるいは物理学者になったか、医者になったかといった行動の様式および内容に関するものである。人間がやさしいか、きついかな、あるいはロマンチストかリアリストか、またはクラシシストかなども、その人の環境へのはたらきかけ、ないし内容に関連する概念である。

一体どんな種類、内容の人間が世の中にあるかについてとりあげてゆけばきりが無い。人間が生産してきた文化そのものを全部語らなければならないということにもなる。

一方効果性の観点から人を見ると、ロマンチストであろうがリアリストであろうが、物理学者であろうが医者であろうが、それぞれ自分の仕事を効果的に仕上げる人間があるし、一方環境の中に自分を位置づけて自分を発揮することがなかなかできない人

もある。人生をやさしい気持で生きる人間もあるし、きつくすす人間もあるが、それなりの道とおりながらつまるところ、おのおの自分らしい意味あるはたらきかけを、環境に対して成し上げていけば、生きがいがあるというものである。

心理学プロパーがあつかう人格形成の問題においても、いかなる人間であるかという、環境への反応の仕方を問題にする研究もなかなか多い。たとえば内向性が外向性かとか、分裂質か循環質かを追及するのはこれに属する。

このことについても、のちにふれたいが、特に幼児の人格形成を問題とする場合、もう一方の問題点、つまり人間のはたらきの効果性に関する問題の方がどうも重要におもえる。

もちろん、ここにあげた人間の二つの側面は、互いに無関係ではないのであって、精神内容そのものが、ただちに効果性のいかに通じることもまた認識されねばならない。

三 環境に対して効果的に反応する

パーソナリティの形成

・効果的な影響力をもつ適応

効果性 (effectiveness) をもつパーソナリティとは、いかえれば目的遂行能力 (competence) をもつパーソナリティである。

適応という語はそのもつニュアンスとして、直面している場面に調子をあわせてゆく、うまくはまりこむという感じが強いが、そ

れよりもさらに積極的に環境にはたらきかけ、自分自身自己実現すると同時に、まわりの世界をも高める。つまり、自己とまわりの世界が一段とすすんで展開してゆく、といったなりゆきがあつともすぐれた適応といえるのである。

ラザラスからの文を引用しよう。

心理学者は、目的遂行能力を強調していろいろな表現をしている。このよい適応の概念の最初の主張者の一人であるオットー・ランクは、他の人間から離れ、個性化し、しかも同時に合一しようとする個人の逆説的な創造的なたかいを強調した。

この見解の最近の所説は、成功的な適応を自己実現の達成——すなわちある人間が可能な限りの最高の能力を成功的に表現すること——とみるエイブラハム・マズローやカール・ロージャズのようなパーソナリティ理論家にみられる。これらの理論家たちは、人間ひとりひとりには彼におしかかる社会的圧力に消極的に調子をあわせるものでなく、社会的な力の支配と彼の最高の知的芸術的能力の表現とを積極的に求めるものとみる。彼らの見解では精神的健康すなわちよい適応は、積極的努力と成長の問題である。

マズローらもいうように、真の意味の自己実現は、ベートーベンとかゲーテとか、またそうでない凡人でも長い努力の生活の末

に到達するものであるかもしれない。しかし、自己実現の精神はどの年齢段階にでも生かされるものだし、誰でも瞬間的には自己実現の経験はもっている。そしてそういった経験の積み重ねが、やがて自己の可能性をフルに展開したパーソナリティになるのだろう。

さらにラザラスから引用すると、

(マリーエ・ヤホーグ)は精神的健康の規準として、自覚、自己受容、成長、発達、自己実現、統合(心理的力のまとまりとバランス)、自律性、欲求を曲げずに真実を認識すること、および環境の支配といった特質をあげている。彼女は人間関係を統制し、各自が、選んだ方向に従って自己発展をなしとげる力を重要なものとみる。彼女によれば、目的遂行能力は、独立をさせ、自分自身の価値をのぼすことをえしめるのだから、そうした力のある人は、ない人より、よく適応しているというわけである。

右の二カ所の引用文に出ているように、自己実現を意味する適応とは成長なのである。これはいいことばである。私たちは子どもを導くにあたって、また自分自身のくらしのためにも、このことばを深く味わいたいとおもう。

・乳幼児期における欲求不満と適応力の養成

青年期や成人期になって、環境の刺激に対して弾力的な力いっばいの反応ができず、腰ぬけのようになってしまふ、つまり効果性のない行動をするいちじるしい例はノイローゼである、これについてカール・メニンガーは次のようにいつている。

ニューロティック患者というものは、彼が子ども時代に、自分の本能的傾向と周囲の情勢との間に起きた衝突や、くいちがいを、エゴ(自我)が完全に納得するように解決されないで育った人であつて、この人はその結果、いつも途方もない犠牲を払わなければ彼が必要とする満足を得られないようなビヘイビヤに耽溺しないではいられなかった、というような人たちである。……ニューロティックな人々は、種々雑多な機会にはさまつて、どれを捕えようかと混乱させられ、引き裂かれて心が乱れているのだというべきであるかもしれない。……彼の自分で意識していない頭の中で、二つのどうしても融和することのできない傾向とその反対傾向との間に、猛烈な闘争が展開しているのである。

こういつた症状の人は、種々雑多の自分の欲求や環境からの圧力が相互に葛藤し、これを解決しきれない状態にしているのである。彼は一つのことをしようとして、別のことをしたがっている。正

常人の場合、葛藤は自分の態度決定によって、おさまり、片がつくのである。

それゆえ、ノイローゼを研究すると、一般によい葛藤解決というものがいかにあるべきかが暗示されるのである。

ここで葛藤およびその解決について述べてみよう。

葛藤とは、二つあるいはそれ以上の、相排除しあう欲求が同時に存在する場合に、その間に生ずる摩擦のことである。それらの葛藤は、二つともが自分の心の中に存する欲求間におこるものであることもあれば、また、自分の心の中にある欲求と、外部からの要求との間におこるものであることもある。前者の例では、子どもが、へやの中でおもちゃ遊びをしたいし、同時に部屋の外へ出てゆく母親のあとを追いたいとおもう。後者の例では、子どもが探究したい気持から、家の中のものを何でもいじってみたいとおもうのに、親は子どもがこわしては困るものにさわってはいけませんという。

こういった葛藤を、欲求をもつ人間は、ゆくところ常に経験する運命にある。子どもが物をいじりたいのに親が禁止するということでも、子どもが成長して、いじってはいけないことを自分自身で知るようにになると、次にはさわってはいけないという考えと、さわりたいという気持の両方が自分自身の心の中で葛藤する。

葛藤に関して、それにかかわる欲求の種類の点から総括的になされた分類を掲げよう。(南博)

(一) 外部的な拘束からくる義務感と、自身の欲求との間におこる葛藤

(二) 外部的な誘惑と、内部的な義務感との間におこる葛藤

(三) 外部的な欲求が二つ以上同時に存在して、その欲求の間におこる葛藤

(四) 内部的な諸欲求の間におこる葛藤

欲求は人間の生活の原動力であるから無限に強いものである。満たすことをとりやめたからといって、欲求は消えさるものではなくて、無意識の世界に残存してなおも時あらば陽の目をみようととしてうごめいているとフロイトはいつている。自分として、どの欲求を生かそうかとか、環境の要求に従おうかなどの葛藤は、無意識の世界でも行なわれるが、私たちがよくわかるのは意識の世界の状況である。

また欲求には、元来、対象が好ましいのでその方に向かいたいとねがう欲求(+)と、対象が好ましくないでそれから逃れたいという欲求(-)とがある。このプラスとマイナスの欲求の出あい方によって、

(一) (十) 同士の欲求間の葛藤

(二) (一) 同士の欲求間の葛藤

(三) (十)と(一)の欲求間の葛藤

の三種がでてくる。この中で、プラス同士の葛藤は比較的問題が

少ないが、マイナス同士、もしくは、プラスとマイナス間の葛藤は解決が複雑であり、人間の心に痛い痕跡を残しやすい。

葛藤への反応として次のような分類がなされている。(南博)

(一) 単純な選びによる解決

(二) 一方の欲求満足による解決

(三) 振子反応。すなわち、一方の欲求を満足させようとする方向へむかう途中、他方の欲求不満が気にかかり、それを満たしたくなって、振子のように逆行してゆく。こうしてひどいときには、両極の間を振子のように何回も何回も往復する。

(四) 葛藤から逃避もしくは回避する。すなわち葛藤をまぎらすために無関係な行動に没頭したり、飲酒、放蕩などによって心理的な逃避をこころみる。またこのような逃避や回避さえも不可能なときには、まったく無気力、無抵抗となり、葛藤未解決状態のまま経過する。

(五) 破局反応。結果が生命の危険をとまなうような葛藤に対しておこる。もつともふつうには、病的な焦燥状態に陥り、やたらに駆けまわったり、跳びはねたりする運動がおこる。神経症やヒステリーの発作などはその病的な例である。

みずからの選択意志に基づいて葛藤を解決し、欲求を満たすことに成功したとき満足感が経験される。葛藤の解決感や満足感がなければ——つまり、葛藤があるだけで、いつもフラフラ、ある

いはイライラしていたのではたまらないことは単に想像するだけでわかる。

解決感と満足感は私たち人間にとってこの上なく貴重なものであって、この経験あってこそ、自分は環境と対決できたのだ、自分自身に勝つたのだという、生きる自信をもつことができるのである。個々の欲求はすべて生のエネルギーそのものであるが、一方特定の欲求を妨害する他の欲求や要求とたたかって勝つという事態は自我(ego)の形成を意味する。社会の中に生きる生物である人間は、なまの欲求そのままによつては生きられないのであって、自我をうちたててゆくことによつて、独り立ちし、目的を遂行することができるようになるのである。

幼い子どもときから自分自身の力で欲求を満足し、葛藤解決した経験をもたなければ自我はできてゆかない。つまり人間として育つてゆかない。欲求不満は不幸なことであり、葛藤は不愉快をもたらず。それなのに、欲求不満や葛藤こそが、人間を人間として育てるというパラドックスがある。

注意しなければならぬ重要点は、おとなが子どもを、欲求不満や葛藤を、自分で解決できない事態におとし入れてしまうことが、ひじょうに多いということである。気がつかないでそういうことをしていることを絶えずおそれるものであるが、はたからみて気がつく現象だけを数えあげてもキリがない。

たとえば三歳児保育をみていてよくおもうことだが、集団生活

になじませるといふ意味を保育者がとちちがえて、何でもいっせいにしなければいけないことと解釈し、軍隊のように整列させたり、そろって「イタダキマス」をさせたり、おもちゃを片づけねばならぬことをきびしく印象づけたりすることがある。

三歳児は自分のことをするのに精いっぱいなのに、他人の動作に気を配って、他人の動作と自分の動作とをそろえるように自己調節することはムリだとおもう。できないことをしどけたとしても、そこに満足感を生まねず、ただ残るのは、次の動作をすることに気ぬけた弛緩だろうとおもう。

その他母親が子どもに無理を強いて、幼稚園から帰ってフランス語やピアノの勉強をさせるとか、子どもが到達しきれないようなレベルにまでお行儀や知的訓練を指導しても、子どもはそう簡単に外からの要求を内化して自発的に仕事を完成した体験にまで至ることはとうてい不可能だから、欲求不満が心の中に積み重なり、絶えず不安定な気持をいだくことになる。結局子どもがつとめてできる、完成の満足感が得られる程度のことを、一步一步積み重ねてゆくことが最高の効率を発揮することになる。

私はおもものだけでも、ある一つの動作をしおえたあとの感じというものは、セイセイして弾力的で、すぐ次くる動作をまた効果的にしとげたいとの、余裕ある元気にあふれるようなものでなければならぬ。えてして従来示されているお行儀は、形式的でかっこうはついているが一連一連が終止符によって終わって

いて、次々にはずみをつけて前進してゆき、環境を意欲的に支配し、晴ればれた満足感を個人個人が感ずるようになってきていないとおもう。お行儀やしつけは、そのことのためにあるのではなく、もつと機能的に考えて、社会がスムーズに動くように、そして社会の中で自分の生活がスムーズにゆくように、つくられるもののだとおもうべきである。

行儀やしつけの考え方は社会の中から生まれるもので教師が全責任を負うべき性質のものではないとおもう。しかし、しつけや教育することが、かえって子どもを妨害することになるとあれば、教師自身一つ一つの子どもへの呼びかけが、子どもの動作の効果を増すものであるかどうかについて反省せざるをえない。

引用文献

・個性と適応 ラザラス著 帆足喜寿子訳

岩波書店 一九六六年

・人間の心

カール・メニンガー著 草野栄三良訳
日本教文社 一九五一年

・異常心理学—人間行動の基礎論— 南、井村、加藤著

世界社 一九五一年

(川村短期大学)